令和３年度

小金井平和の日記念行事

「平和作文集」

小金井市

は　じ　め　に

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を３年ごとに行っています。昭和２８年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年１２月２０日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和３５年１０月３日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和５７年４月１日には、世界の唯一の核被爆国として、また、平和憲法の精神からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和５４年３月２０日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「非核平和映画会」、「平和行事参加の旅」、「原爆パネル展」、「平和講演会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和市長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成２６年１２月１８日に戦後７０年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づいて実施した平和の日記念行事における作文コンクールの応募作の中から４編を選定し、文集にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にしていただければ幸いです。

令和４年３月

企画財政部広報秘書課

目　次

○小金井平和の日記念行事作文コンクール

【入賞作文】

小学生の部　大賞

「命のとうとさを考える夏」

秋草　陽太（小金井第四小学校　６年生）・・・・・・・・１

小学生の部　優秀賞

「命でつなぐ命」

浦部　千晴（緑小学校　６年生）・・・・・・・・・・・・・３

中学生の部　大賞

「平和な未来へと踏み出すために」

徳永　楓（東中学校　３年生）・・・・・・・・・・・・・・５

中学生の部　優秀賞

「曾祖母が教えてくれた事」

横須賀　可憐（小金井第二中学校　１年生）・・・・・・７

小学生の部　　大　賞

「命のとうとさを考える夏」

秋草　陽太（小金井第四小学校　６年生）

僕は毎年夏になると、柔道の先生から戦争のお話を聞くことができます。

先生は今年８５歳で戦争を経験しています。先生が２年生だった時、東京大空襲がありました。その日の東京の空はとても薄暗く曇っていてアメリカの戦闘機Ｂ２９が今まで見たこともないような数で隊列を組んで空を飛んでいたそうです。Ｂ２９の胴体には無数の爆弾が取りつけられていてその爆弾により町は赤く燃えさかっていたそうです。

先生は座布団を頭に乗せて逃げた時、後ろから走ってきた男の人に「頭の座布団が燃えているぞ！」と声をかけられ、あわてて座布団を放り投げて逃げたというお話を何度もしてくださいます。

そして当時は食べ物がなく先生は狭くて寒い防空壕の中でいつもおなかをすかせていたこと、先生のお母さんは自分のぶんの食べ物をいつも分けてくれていたこと、小金井市の上空には三鷹の飛行場に向かってたくさんの飛行機が飛んでいたことや、墜落したＢ２９を大勢の人と見に行った時には、操縦席にアメリカの女性兵士が倒れていて爪には赤いマニキュアが塗られていて先生は生まれて初めてマニキュアを知ったこと・・・。

そのお話をするときの先生の目はいつも涙ぐんでいらっしゃいます。

口で言うより何十倍も怖かったのだと思います。

僕が実際にその世界にいたら心が壊れてしまうと思います。とても残酷な光景が目に焼き付いてずっと心から離れなくなると思います。

そして衝撃的だったのは戦争が終わった後もアメリカの規制により柔道と剣道をすることをしばらく禁止されていたというのを聞いたことでした。

先生は黒帯が取れる年になったのに柔道をすることができず今の若い人

たちよりも年齢が大きくなってから黒帯を取ったので人よりも遅く師範になったということです。

僕はこの話を聞いて、戦争がまだ続いているような気持ちになりました。

ひとたび戦争になったら大好きな柔道場に行くことも友達と一緒に勉強をすることもできなくなるのだと思うと僕が生きているこの毎日は決して当たり前ではなかったのだと改めて感じます。

僕は一人が一つずつしか持っていないこの命をもう一度考え直し「命を大切に扱う」このことを大切にして大人になろうと思います。

今年は東京でオリンピックがありました。

僕は、武器や戦争で国や民族同士が争うのではなく、スポーツや芸術で競い合う平和な世界が続きますようにと心から祈りました。

小学生の部　　優秀賞

「命でつなぐ命」

浦部　千晴（緑小学校　６年生）

「赤ちゃんと母の火の夜」というお話を知っていますか。このお話はアメリカ軍の爆撃機Ｂ２９による空襲を受けた東京大空襲のころ、出産のために近くの相生病院に入院した武者みよさんと赤ちゃん、そして二人を乗せたたんかを運ぶ山田婦長を含めた十四名の病院の人たちのお話です。

私は初めて「赤ちゃんと母の火の夜」を読んだとき、戦争をとても身近に感じました。

しかし、考えてみると、どうして今まで戦争という出来事に考えをむけてこなかったのかと不思議に思うようになりました。なぜなら、今でも戦争の被害に苦しむ人や、戦争をしている国や地域がまだまだあるからです。戦争という苦しい日々の中で武者さんが入院した相生病院では町が突然の爆弾の雨に包囲されると看護婦さんたちは武者さんと生まれたばかりの赤ちゃんをたんかに乗せて運びはじめます。ほかにも八人の患者さんが合計十四人の看護婦さんと避難しました。

たんかの上にしきぶとんを二枚しき、その上に武者さんと赤ちゃん、そしてかけぶとんが二枚ものせられました。武者さんがたんかがひどく重いはずだと思い、「先生、このあたしだけ、病院に残してくださっていいんです。」と言うと、「患者を殺して医者が生きられますか！」とおこったような表情で言い、武者さんの頭にすっぽりとふとんをかぶせてしまいました。

病院で働く人たちもたんかを持つことはあります。しかし、それは病院の中であり、短きょりのはずです。たんかは二人ずつでしか運べません。それを五時間余りも運ぶとなると苦労だけではすまないはずです。

最初に避難した場所が危険と見て、総武線のガード下へと移動したときにひやひやしたと山田婦長は語ったそうです。たんかを地上におろしてい

たときに猛火とともに避難民がどっとくり出してきて今にもふみつぶされそうになり、「ここは患者がいるんです。生まれたばかりの赤ちゃんと、その子の母親がいるんです！」山田婦長はそうさけび、十四の看護婦がうでを組んで並び、げんじゅうな囲いをつくり、一歩もひかなかったそうです。食べるものにさえこまっているとき、だれかを守るために協力し合うことは容易ではないと私は思います。前にお父さんが「自分が無理だと思う時こそ、もっと強い力がわいてくるんだなー。」と言っていました。その時私は、本当かと、疑っていましたが、うそではないと、このお話を読んで感じるようになりました。一人一人の中にある「使命感」が、十四名の足を突き動かし、その十四人分の命が武者さんと赤ちゃんという二つの命をつないだのです。

私たち人はいつかは必ず死んでしまいます。人の長い長い歴史に比べたら、一人の命は百分の一にも満たないのかもしれません。でも私は、その百分の一にもなれない一つの命に大きく重い意味があると思います。どんな時間を過ごし、何をして、どう生きたか、考え方は十人十色です。一つ一つの命、一人一人の考え方、それこそに意味があると私はつよく思います。その大きな意味と大切な命を、簡単にうばっていいはずがないと私は思います。私はこの平和な時を少しでも長く続けられるような人になりたいと思いました。もしかしたら、それが私の「意味」なのかもしれません。

中学生の部　　大　賞

「平和な未来へと踏み出すために」

徳永　楓（東中学校　３年生）

私はこれまで、学校で様々な平和教育を受けてきました。更に、沖縄や広島などへの訪問を通して、過去の戦争について向き合う経験もできました。戦争のもたらす悲劇を知り、私の平和に対する意識はだんだん変わっていったように思います。今は、戦争は忘れてはいけない過去の出来事であると同時に、今私たちが直面する問題であると思っています。

過去に多くの犠牲を払ってきたにも関わらず、今も世界では様々な戦争や紛争が起き続けています。日本は世界で唯一の被爆国であり、私たち日本人は平和に対する特別な思いを持っていると思います。しかし、日本の国としての平和に対する向き合い方はどうでしょうか。私が最も疑問に思うのは、日本が国として核兵器禁止条約に署名をしていないことです。日本の安全保障問題など理由は色々あるとは思いますが、これは世界から見て、とても矛盾する意思表示ではないでしょうか。この状況でいくら日本の人々が核兵器の怖さを訴えても、世界の国々に届くはずがありません。この日本が抱える矛盾は、今後私たちが様々な意見を出し合い答えを出していかなければならない問題だと思います。

私は、これからの平和教育は、より発展した活動に移行していくべきではないかと思います。私たちが受けてきた平和教育は、過去や現在の戦争で起こったことを見たり聞いたりするものです。私も学校で戦争についてのドキュメンタリー番組や映画を見聞きしたり、実際に平和記念資料館のような戦争の恐ろしさを肌で感じる場所へ行ったりして、自分自身の世界平和に対する思いが育っていると感じます。世界各地で起こっている粉争の現実を新聞や小説、ネットなどで深く調べたりするようにもなりました。しかし、それはただ、自分の中で戦争や平和について考えているだけだと感じる出来事がありました。今年の二月に起きたミャンマーの軍事ク

ーデターです。そのニュースは何度もテレビや新聞で見て、悲惨な状況を十分理解していたし、心を痛めていました。クーデターが起こってすぐの週末、私は家族で街に出掛けました。歩いていると、三・四人のミャンマーの人たちが「今のミャンマーの状況を知ってください」という手作りのチラシを一生懸命街ゆく人に配っていました。彼らの表情は、日本の日常の街に似合わない、とても悲壮感のある顔でした。私は、彼らの故郷は今、あのニュースで見た自国の軍隊が無抵抗の市民を逮捕したり銃殺したりする映像が現実に起こっているのだと思うと、この日本の穏やかな週末が嘘のように感じて、不思議な罪悪感を覚えました。きっと彼らは、まだ状況がはっきり分からない中で、自国の危機を日本の人たちに伝えなければと居ても立っても居られなかったのだと想像しました。私は、彼らに何か言葉をかけたい気持ちになりましたが、何をどう言えばよいか分からず、彼らが配るチラシを受け取ることしかできませんでした。

私は自分の平和に対する考えを、今まで一度も、「誰かに伝えよう」とか「私が伝えていかなければ」と思ったことはありませんでした。それは、話を聞いただけでその怖さを百パーセント理解できている自信はないし、実際は何も経験していない私が戦争の話をするのは失礼だと思う気持ちもあったからです。しかし、彼らの言動を目の当たりにして、私は自分が知っている過去の戦争の悲惨さも、本当は彼らのように誰かに伝えて行くべきなのではないかと思いました。

先程にも述べたように、私はこれからの平和教育は情報や知識を得るだけでなく、そこから得た自分の考えをみんなで語り合う場を増やしていけると良いと思います。私以外にも戦争の話題はほとんどしないという人も多いと思います。しかし、多くの人は今世界中で起こっている紛争で罪のない市民が苦しんでいる映像を見て、みんなそれぞれに心を痛めて、戦争や平和について考えていると思います。お互いに意見を出し合う機会が増えれば、それが当たり前になって、重いテーマだからと戦争について考えることを避けたり変に身構えたりすることも無くなっていくのではないでしょうか。そして何より、戦争を自分にも関係する一つの大きな問題として捉えられるようになると思います。自分が、そして日本が今とるべき行動について考える人が増えたら、日本が平和であり続けるためのアイデアが生まれるし、そうしてその平和を、世界へと繋げていくことができたら

いいなと思います。

中学生の部　　優秀賞

「曾祖母が教えてくれた事」

横須賀　可憐（小金井第二中学校　１年生）

昨夏、曾祖母が亡くなりました。曾祖母は高齢という事もあり、老人ホームにお世話になっていました。コロナの影響もあり、「お見舞いはご遠慮ください。」と言われていたのでなかなか会いに行けず、そのせいか私の事もわかる時とわからない時がありました。

たまに会えた時に、曾祖母は私に、「何歳なの？誰と来たの？」と聞きます。私が「父と母と来ました。」と答えると、曾祖母は「お父さんとお母さんと一緒で良かったね。家族は一緒がいいよね。」とにっこりします。そんな曾祖母には、ずっと忘れられなかった事があります。戦争の事です。

曾祖母は小学五年生の時に東京大空襲で、家族を全員亡くしました。一九四五年三月十日の事です。一日早く、栃木県佐野市に縁故疎開できた曾祖母だけが生き残りました。曾祖母の父は曾祖母を佐野に送った後、他の家族を翌日につれて来るため東京に帰って行きました。そして家族は東京大空襲にあい、曾祖母は戦争孤児になりました。

あの時、家族全員で疎開していたら、一人ぼっちにならなかったのに。曾祖母は七十五年経っても辛い記憶を忘れる事が出来ませんでした。自分一人だけが助かり、悲しくて辛くて仕方なかったけどそれでも、もしかしたら助かってどこかで生きているかもしれない。だって、父は明日必ず弟をつれて来ると約束したんだから。曾祖母はずっとそう信じていました。でも実は家族は全員空襲の犠牲になっていました。ご遺体が発見されたからです。曾祖母はその事を知りません。まだ幼い曾祖母が絶望しないよう、親戚の人が隠していたからです。佐野の親戚の家で育ててもらった曾祖母には、辛い事だけでなく嬉しい事や、楽しい事も沢山あったでしょう。それでも、戦争の事を忘れる事は出来なかったのです。

お葬式の日、曽祖父は「おばあちゃんはきっと天国で家族に会えたよ。」

と言いました。そうであったらいいな、と私も思いました。でも、できる事ならば天国よりも現実で会いたい。死んで会うよりも生きて会いたい。目に見える距離で家族一緒に暮らしたい。私はそう思います。

どこの高校に行くの？これから何がしたい？将来の夢は？そんな事が考えられるのは、未来に希望が持てるのは、全て今が平和だからです。家族が一緒に笑って暮らせる事。学校に行って友達と会える事。この当たり前の日常を戦争は奪っていきます。私は今の日本に生まれて、たまたま平和が当たり前と言われる時代に育ちました。この幸せな時代に生まれてこられて良かった。心からそう思います。毎日が幸せだから、「宿題やらなきゃ」「部活がんばろう」といった事を考えていられるのです。何気ない日常が当たり前である事がどんなに幸せな事か。だから、この平和な日常を守るために私達にできる事は何か考えなければなりません。

曾祖母に聞いた話をきっかけに、「東京大空襲を忘れない」著　瀧井宏臣という本を読みました。この本では、東京大空襲はなぜ行われたのか、そのとき子供達はどんな体験をしたのか、当時はまだ子供だった人達の体験談が書いてありました。読み進めていくと、手が震えるほど恐ろしく、何故こんな目にあわなければならないのか筆舌に尽くしがたい戦争の悲惨さが胸に迫ってきて涙が出てしまいました。曾祖母もこんな思いをしたのだろうか。こんな恐ろしい思いをしながら過ごしていたのだろうか。そう思いながら最後まで読みましたが、遠い日の曾祖母の姿に重なるようで、読んでいて本当に辛かったです。これは七十六年前にあった現実の話なのです。

今の日本人から見ると、戦争は遠い昔の話です。だけど、世界では今も戦争をしている国があります。アフガニスタンです。毎日、ニュースでやっていますが、こんなに辛くて悲しくて、何も生まない失うだけの戦争をまだやっている国があるなんて、私は驚きました。日常を奪われ、国から逃げようと空港に押しよせる人々の姿を見てショックでした。

戦争で犠牲になるのは民間人です。子供と女性の犠牲が特に多く、テロや爆撃による、大量虐殺行為で亡くなっています。戦争なんて嫌だ。戦争だけはどんな理由があってもしてはいけない。明日がどうなるか分からないという事はあってはならない。そう世界中の人々が願っていれば戦争なんて起きないと思います。戦争のない世の中をつくるために、どうしたら

良いのかというと、日本の過去をしっかり知り、戦争とはどういうものか知る事だ。と「東京大空襲を忘れない」に書いてありました。

平和のために何をしたら良いのか。曾祖母が話してくれた事をいつか私の子供にも聞かせてあげたいです。この穏やかな日々を守るため、平和な未来につなげるため。それが、私にできる事だと思います。

平和作文集

発　行　令和４年３月１２日
　　小金井市

編　集　小金井市企画財政部広報秘書課広聴係
　　小金井市本町六丁目６番３号
　　☎０４２－３８７－９８１８

再生紙を使用しています。